

THE WALL STREET STOCK

Ferdinando Frega - Nando the Scribe



WALL STREETの株

Wall Streetサーガへの序章

寄宿学校に入った日のことは、決して忘れない。

1970年10月15日。木曜日だった。

その日のために、父が来ていた。Gilletteに午後の休みを願い出たのだ。めったにないことだった。振り返ってみてわかる。父はただ子どもを学校へ送り届けていたのではない。Gilletteの物語の小さなひとかけらを、まだ2人のどちらにも理解できない世界へ引き渡していたのだ。

シスター・ジュゼッピーナという若い修道女が迎えに出てきた。

白い肌、青い目、若々しい顔。あとはすべてヴェールが隠していた。彼女は私の手を取り、1年A組へ連れて行った。そこでは担任のシスター・ドミネッラが待っていた。

シスター・ドミネッラはすでに年老いていた。

しきりに膝をさすり、驚くほどの自信で雨を予言した。本人によれば、天気は彼女の関節の中に住んでいた。膝が痛めば、雲がやって来る。

教室に入ると、彼女はもう私の名前を知っていた。

それどころか、誰もが知っていた。

あの壁の内側では、知らせはすぐに広まる。

貢ぎ物は、私より先に着いていたのだ。

どの部屋にも同じ贈り物があった。1970年代の赤いGilletteのロゴが入った、質素なビニール袋。飾りは刃の絵だけだった。

幼すぎてわからなかったが、私はすでに、生涯ついて回ることになる会社の小さな大使になっていた。

最初の授業は、行いについてだった。

良い行い。

6歳には、それは十分に単純に思えた。

良い行いは良い。

悪い行いは悪い。

以上。

だが人生には、いつものように、別の計画があった。

数年後、私は知った。行いは決して、それが何であるかによって裁かれるのではない。それを取り巻く物語によって裁かれるのだ。

誰かに飴をひとつやれば、それは善行になる。

同じ飴を別の目的に使えば、たちまち悪行になる。

行いは変わらない。

変わるのはナラティブだけだ。

それが、私の人生で最初の本当の教訓だった。

道徳ではない。

宗教ではない。

規律ではない。

ナラティブ。

同じ事実を正反対の意味に変えてしまう、奇妙な力。

数十年後、Gilletteは私をボストンへ連れて行くことになる。

世界中から来た同僚たちとともに、私はやがて、寄宿学校の子どもが夢にも見ない金融の都に立つことになる。ニューヨークだ。

それも、Wall Streetのすぐそばに。

だが、それはまた別の話だ。

すでに別のところに書いてあるし、文学の余白を埋めるためだけに同じことを繰り返すのは、昔から好きではない。

それでも、ひとつだけ残る思いがある。

人はいつも、その行いによって記憶される。

ある行いは物語になる。

ある物語は歴史になる。

そして、もしその行いがたまたま紙に書かれ、取引され、値をつけられ、買われ、売られ、毎日相場が立つとしたら...

いったいどこ誰が、それを忘れるというのか。

フェルディナンド・フレーガ

BLADEFREGA

Wall Street サーガ